

カウンセラーの言語的応答に関する実験的研究 —カウンセリング状況への評価に及ぼすカウンセラーとクライアントの応答志向性の効果—

高 橋 功・潮 村 公 弘

An Experimental Research on Counselor's Verbal Response: Effects of Counselor's and Client's Response Orientations on the Evaluation for Counseling Situations

Isao TAKAHASHI, Kimihiro SHIOMURA

Abstract

The present research investigated the effect of consistency/inconsistency in the response orientation of counselor and client on impression ratings by observers toward the counselor and the counseling situations. Experiment 1 (participants are sixty female university students) arranged 2 factorial design as experimental manipulations, namely, response orientation of counselor (2 conditions: problem-focused response vs. solution-focused response) as a within-participant factor, and response orientation of client (2 conditions: negative response mode vs. positive response mode) as a between-participant factor. The results showed that two-way interaction effect for response orientation of counselor x response orientation of client was not significant, and solution-focused counselor was rated positively by observers in some contexts. Experiment 2 (participants are sixty-four female university students) was conducted with same experimental materials and same 2 experimental factors (response orientation of counselor, and response orientation of client) as Experiment 1, excepting for arranging both factors as between-participant factors. The results revealed the significant two-way interaction effect for response orientation of counselor x response orientation of client, and problem-focused counselor was rated positively in some contexts. Additionally, both in Experiment 1 and 2, the relationship between self-esteem trait of observers and experimental factors was examined and discussed.

Key words : Clinical Counseling, Solution-Focused Approach, Problem-Focused Approach, Response Orientation, Self-Esteem

和文抄録

本研究は、カウンセラーとクライアントの応答志向性の一致／不一致が、カウンセラーやカウンセリング状況に対する観察者の印象評価に及ぼす効果について検討した。実験1（参加者は女性大学生60名）では、カウンセラーの応答志向性要因（問題志向型応答と解決志向型応答：参加者内要因）と、クライアントの応答志向性要因（否定的内容の応答と肯定的内容の応答：参加者間要因）が設定された。その結果、応答志向性の交互作用効果は認められず、解決志向型応答カウンセラーが高く評価された。実験2（参加者は女性大学生64名）では実験1と同じ刺激材料と実験操作要因を用いて、両要因を参加者間要因として実施した。その結果、実験1とは異なり、応答志向性の交互作用効果が認められ、また問題志向型応答カウンセラーが高く評価された。さらに実験1・実験2において、観察者の自尊心特性との関連性について検討され、考察がなされた。

キーワード：臨床的カウンセリング、問題志向型アプローチ、解決志向型アプローチ、応答志向性、自尊心

問 題

効果的なカウンセリングを目指して、カウンセラーの特性やカウンセラーへの来談意図への評価に影響を及ぼすカウンセラー要因とクライアント要因が検討されてきた。カウンセラー要因としてはアプローチの相違 (LaCrosse & Barak, 1976; Gustavson et al., 1981)、経験の有無 (Schmidt & Strong, 1970; Barak & Dell, 1977)、指示性 (島本, 1996) などの要因が検討され、クライアント要因としては認知スタイル (Stoltenberg et al., 1986)、レディネス状態 (山本, 1996)、表象型 (織田・佐藤, 2003) などの要因が検討されてきた。

カウンセラー側の要因であるカウンセラーの言語的応答 (verbal response) は言い換え (paraphrase)、感情の反映 (reflection of feeling)、開かれた質問・閉ざされた質問 (open and closed questioning)、繰り返し (restatement) などに分類され (Ivey, 1982; Hill & O'Brien, 1999)、さまざまな指標を用いてそれらのもつ影響が検討されてきた。例えば、促進性が高いと判断された「言い換え」「感情の反映」は、カウンセラーへ向けたクライアントの好ましい認知的反応に結びつく (Uhlemann et al., 1994)。また、クライアントに知覚される共感度との関連性を検討した研究では、カウンセラーの「反射」(相手の体験を言い換えたり、表現したりする)、「確認」(互いに共有している思考・感情などを表明する)、「情報」(客観的事実の表明)の使用頻度と正の関連があり (田中, 2006)、「一般的助言」の使用頻度とは負の関連がある (Barkham & Shapiro, 1986) ことが示されてきた。さらに、適切な「繰り返し」が受容度に、また適切な「繰り返し」「明確化」がクライアントの自己の内面への注目度に、それぞれ有意な正の影響を及ぼす一方、不適切な「質問」「繰り返し」「明確化」「支持」がクライアントの自己の内面への注目度に有意な負の影響を及ぼすことを示す研究 (中西ら, 1998) もある。

カウンセラーの言語的応答の頻度にはカウンセラーの依拠する理論的志向性が反映することが報告されており (Hill et al., 1979; Gustavson et al., 1981; Lee & Uhlemann, 1984)、それぞれの応答の内容にも理論的志向性が反映すると考えられる。その理論的志向性については、精神分析をはじめとした伝統的な心理療法と、短期療法 (Brief Therapy) の一派である解決志向アプローチとが対照的に論じられることが多い (北

村, 1998; 入谷, 2003; 長谷川, 1999)。前者の主な特徴は、特定の結果(問題)は特定の原因によって生じるという直線的因果律を前提として、時間軸上の因果律を重視し (北村, 1998)、これこそ原因であるというものを求めて過去へ過去へと直線的に突き詰めていき (長谷川, 1999)、クライアントが語る問題は根底にある病理を反映するとみなし (入谷, 2003)、明暗に長期的な取り組みを強調する (白木, 1994a; 入谷, 2003) といった特徴がある。De Jong & Berg (1998) は、問題の診断と治療という医学モデルの影響を受け、問題の性質を判断した後で介入する体系的特徴を有しているアプローチを「問題解決アプローチ」として位置づけ、後述する解決志向アプローチと対照的なものとして論じている。問題解決アプローチでは1) 問題描写とデータ収集、2) 問題のアセスメント、3) 介入計画、4) 介入、5) 評価と追跡調査という諸段階を追うとされる。これは直線的因果論を前提とした従来の心理療法と重複した考え方を持つと言えよう。本研究では以上のアプローチを総称し問題志向アプローチ (Problem-Focused Approach) とする。これに対し、解決志向アプローチ (Solution-Focused Approach; SFA) とは、Erickson (1954) の治療に関する技法・考え方を端緒とした短期療法のうちの1つのモデルである (宮田, 1994)。問題とその解決法についてはクライアントが一番よく知っており、そのために必要な力や資源をもちながら精一杯やっているという前提で、過去や現在よりも未来へ、問題より解決へと焦点を合わせるアプローチであり、de Shazerら (1986) が発展させた援助法である (高工, 2001)。クライアントを決して批判的に見ず、また病理や問題点を治療し変化させようとするのではなく、人間の強さに深い敬意を示しながら、ダイレクトに解決の状態を目指して治療を進める (白木, 1994b)。SFAは基本的段階として1) 問題の描写、2) ウェルフォームド・ゴール (現実性のある目標) を作ること、3) 例外探し、4) 面接の終わりのフィードバック、5) クライアントの進歩の評価という諸段階を追い、その過程で a) クライアントの思考の枠組みをもとにウェルフォームド・ゴールを作ること、b) 例外に基づいて解決を作りだすことの2つを活動の目的としている (De Jong & Berg, 1998)。それを達成するために解決志向アプローチではさまざまな援助的な質問技法が考案されており、解決を導き出すのに有効な質問として白木 (1994b) は①ミラクル・

クエスチョン（奇跡が起きて問題が解決した際の様子を具体的に述べてもらう質問）、②「例外」の質問（問題が起きていない時間、既に生じている解決の一部を見つけ出す質問）、③スケーリング・クエスチョン（いろいろな状態や印象について数値上で表現してもらう質問）、④治療前の変化を見つける質問、⑤コーピング・クエスチョン（クライアントが困難を抱えながらも生きていける力を探求する質問）の5つを挙げている。

以上から、問題志向アプローチに基づいたカウンセラー（以下、問題志向型カウンセラー）の言語的応答は、主としてクライアントの問題、病理といった否定的側面に着目した内容となりやすいのに対し、解決志向アプローチに基づいたカウンセラー（以下、解決志向型カウンセラー）の言語的応答は、主としてクライアントの有する強さ、解決後の状況といった肯定的側面に着目した内容となりやすいと考えられる¹⁾。そこで本研究ではカウンセラー側の要因として2つの対照的な応答スタイル条件を設け、大学生観察者によるカウンセリング状況への評価に及ぼす効果について検討する。そのさい、問題志向型または解決志向型の応答を行うカウンセラーへの評価に差異をもたらすクライアント側の要因の1つにクライアントの肯定的／否定的応答量の違いがあると考えた。すなわち、カウンセラーとクライアントとの言語面での一致性の点から考えれば、否定的応答量が多いクライアント（以下、否定的応答クライアント）の場合には解決志向型カウンセラーよりも問題志向型カウンセラーが高く評価されるのに対し、肯定的応答量の多いクライアント（以下、肯定的応答クライアント）の場合には、問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーが高く評価されることが考えられる。それゆえ、カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプとの交互作用効果について検討する。

次にカウンセリングなどの対人援助サービスに援助を求めるかどうかの認知的枠組みである被援助志向性と個人差特性、特に自尊心の程度には関連性が指摘されている（木村・水野, 2004; 脇本, 2008）ことから、評価者のこれらの特性がカウンセリング状況への評価に影響を及ぼす可能性が考えられる。自尊心と被援助志向性との関連性に関する仮説の1つに自尊心の高い人は援助を求めることで自己認知との一貫性を失うことから援助を求めないという認知的一貫仮説（Nadler,

1998）がある。この仮説を踏まえると、高自尊心の観察者の認知特性として自身のもつ自尊心の高さを維持できる情報が受け入れやすいために、解決志向型カウンセラーの応答が肯定的に受け取られる可能性が考えられる。一方、低自尊心の観察者にとって、解決志向型カウンセラーの応答は容易には受け入れられず、むしろ、問題志向型カウンセラーの応答における否定的側面を無視せずに探求するという点が肯定的に評価される可能性が考えられる。それゆえ、カウンセラーの応答志向性と観察者の自尊心の程度との交互作用効果についても検討する。

実験 1

目 的

カウンセラー側の要因として問題志向型カウンセラーと解決志向型カウンセラー、クライアント側の要因として肯定的応答クライアントと否定的応答クライアントを設け、観察者によるカウンセリング状況への評価に及ぼす効果について検討する。そのさい、カウンセラーとクライアントの応答志向性の一致／不一致という観点から仮説1を設定する。「仮説1：問題志向型カウンセラーは肯定的応答クライアント（応答志向性不一致）よりも否定的応答クライアント（応答志向性一致）において、解決志向型カウンセラーは否定的応答クライアント（応答志向性不一致）よりも肯定的応答クライアント（応答志向性一致）において、カウンセリング状況を高く評価されるであろう。」

次に、観察者の自尊心との関連から仮説2を設定する。「仮説2：高自尊心群は問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーによるカウンセリング状況を高く評価するのにに対し、低自尊心群は解決志向型カウンセラーよりも問題志向型カウンセラーによるカウンセリング状況を高く評価するであろう。」

方 法

実験参加者：大学1年生86名（男性6名、女性80名）が実験に参加したが、性別要因の交絡を避けるため女性のみを対象とし、さらに欠損値を含んでいた3名を除外した。実験参加者77名で操作チェックを行ったさい、クライアント要因の操作の有効性が認められなかったため、以下の手続きを採用した。まず、クライアント側の操作チェック2項目（前向き度、応答内容

肯定度)の平均値を求め、この値が肯定的応答クライアント条件 ($M=3.64$, $SD=0.74$) では-1SD以下、否定的応答クライアント条件 ($M=3.55$, $SD=1.03$) では+1SD以上の参加者については、クライアントへの注意の向け方が不十分であったと考え、それぞれ除外した。次に、4つの実験条件で最も参加者数の少ない条件での人数(具体的には15人)に統一するために各条件内で無作為に参加者を除外し、最終的に60名(各条件15名)を対象に分析を行った。

実験デザイン: カウンセラーの応答志向性要因(解決志向型カウンセラー/問題志向型カウンセラー)×クライアントの応答タイプ要因(肯定的応答クライアント/否定的応答クライアント)の2要因(2×2)配置計画。第1要因を実験参加者内要因、第2要因を実験参加者間要因とする混合モデルである。なお、順序効果に関するカウンターバランスをとるため、解決志向先行条件と問題志向先行条件を設定した。

刺激材料: カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプの組み合わせから構成される4つのカウンセリング場면을収録したビデオテープを刺激材料とした。カウンセラー役には5年の臨床経験を持ち、現役で心理業務に従事している臨床心理専攻の社会人大学院生(女性)に、クライアント役には同じく臨床心理学を専攻する女性の大学院生にそれぞれ担当してもらった。なお、カウンセリング場面のシナリオは佐治(1985)を参考にして、無気力感を訴える女子学生を想定し、実験者が作成した。

手続き: 実験者効果を避け、条件間での教示の統一性を保つために、実験仮説を知らない学生が教示文を読み上げる場면을収録したビデオテープを作成し、それを呈示することで教示を行った。実験参加者はカウンセリング場面が収録された刺激材料を視聴した直後に、質問紙に回答した。実験参加者全員が回答を終えたのを確認してディブリーフィングを行い、実験を終了した。

カウンセラーの言語的応答の操作: 解決志向型カウンセラーと問題志向型カウンセラーはそれぞれ次の言語的応答から構成した。解決志向型カウンセラーは、肯定的事実や感情の繰り返し、肯定的側面に着目したフィードバック、肯定的感情の反映、質問(解決後の状態の質問、「例外」の質問、コーピング・クエッション)、肯定的事実や感情に着目した要約で構成した。これに対し、問題志向型カウンセラーは、否定的事実

や感情の繰り返し、否定的側面に着目したフィードバック、否定的感情の反映、質問(原因追究、問題追究、心理的課題の追究に関わる質問)、否定的事実や感情に着目した要約で構成した。

クライアントの言語的応答の操作: クライアントの各応答文は肯定的または否定的事実や感情を示す4つのセンテンスから構成され、その構成比を次のように操作した。肯定的内容の応答が多い「肯定的応答クライアント」は1応答発言中、1センテンスを否定的事実や感情、残りの3センテンスを肯定的事実や感情で構成した。これに対し否定的内容の応答が多い「否定的応答クライアント」は1応答発言中、1センテンスを肯定的事実や感情、残りの3センテンスを否定的事実や感情で構成した。

従属変数: カウンセリング状況や観察者の個人差特性を測定するための質問紙を以下の内容で構成した。Johnson(1994)の面接評定尺度より、クライアントに対するカウンセラーの受容度、関心度、理解度、誠実度、カウンセリングの円滑さ、深さ、有用度の7項目。織田・佐藤(2003)の項目を参考に、カウンセラーの非言語肯定度、親しみやすさ、積極性、共感度、カウンセリングの成功度、観察者の共感度、来談意図の7項目。操作チェック項目として、カウンセラー側要因は、肯定的注目度、否定的注目度、原因追究度、例外追究度の4項目、クライアント側要因は、前向き度、応答内容肯定度の2項目。個人差特性指標である自尊心は山本ら(1982)による尺度を取り上げた。

結 果

操作チェック: 各操作チェック項目を従属変数として、カウンセラーの応答志向性(2)×クライアントの応答タイプ(2)の2要因分散分析を行った。その結果、カウンセラーの肯定的注目度 ($F(1,58)=31.95$, $p<.01$)、否定的注目度 ($F(1,58)=25.66$, $p<.01$)、例外追究度 ($F(1,58)=10.53$, $p<.01$) においてカウンセラーの応答志向性の主効果が認められ、カウンセラーの肯定的注目度、例外追究度は問題志向型カウンセラーより解決志向型カウンセラーのほうが有意に高く、また、カウンセラーの否定的注目度は解決志向型カウンセラーより問題志向型カウンセラーのほうが有意に高く評定された。

一方、クライアントの前向き度 ($F(1,58)=9.05$, $p<.01$)、応答内容肯定度 ($F(1,58)=9.13$, $p<.01$) についてはク

クライアントの応答タイプの主効果が認められ、いずれも否定的応答クライアントより肯定的応答クライアントの方が有意に高く評価された。

これらの結果はカウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプの操作が有効であったと判断できるものである。

順序効果の検討：各評定項目（14項目）を従属変数としてカウンセラーの応答志向性（2）×クライアントの応答タイプ（2）×呈示順序（2）の3要因分散分析を行った。その結果、カウンセラーの応答志向性と呈示順序との有意な2要因交互作用効果が非言語肯定度、親しみやすさ、積極性、共感性、関心度、理解度、成功度、円滑度、深さ、有用度、来談意図（以上1%水準）、受容度、誠実度（以上5%水準）において認められた。

単純主効果の検定の結果、問題志向型カウンセラーにおける呈示順序の効果は、親しみやすさ、深さ、来談意図（以上1%水準）、非言語肯定度、有用度（以上5%水準）において認められ、いずれも2度目に呈示された場合（解決志向先行条件）の方が有意に高く評価された。一方、解決志向型カウンセラーにおける呈示順序の効果は、非言語肯定度、親しみやすさ、積極性、共感性、受容度、関心度、理解度、誠実度、成功度、円滑度、深さ、有用度、来談意図において1%水準で認められ、いずれも2度目に呈示された場合（問題志向先行条件）の方が有意に高く評価された。

実験デザインに基づく分散分析結果：各評定項目（14項目）を従属変数としてカウンセラーの応答志向性（2）×クライアントの応答タイプ（2）の2要因分散分析を行った。その結果、カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプとの有意な交互作用効果は認められなかった。

カウンセラーの応答志向性の主効果は、成功度（1%水準）、受容度、関心度、誠実度、来談意図（以上5%

水準）、共感性、深さ、有用度（以上10%水準）において認められた。いずれにおいても、問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーが高く評価された（表1）。

観察者の個人差特性指標との関連性：個人差特性である自尊心は中央値分割とし、それぞれ高群、低群に分割した。各評定項目を従属変数としてカウンセラーの応答志向性（2）×クライアントの応答タイプ（2）×自尊心（2）の3要因分散分析を行った。その結果、自尊心とカウンセラー応答志向性の交互作用効果が共感性（ $F(1,56)=3.06, p<.10$ ）、深さ（ $F(1,56)=2.87, p<.10$ ）、来談意図（ $F(1,56)=2.98, p<.10$ ）において傾向差水準で認められた（図1～3）。単純主効果の検定の結果、共感性では、高自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の有意な効果（ $p<.05$ ）、傾向差水準で解決志向

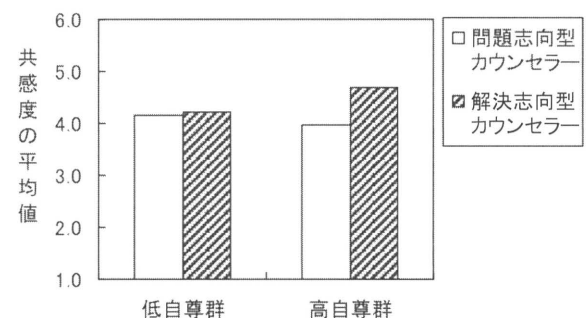


図1. 共感性に及ぼす交互作用効果

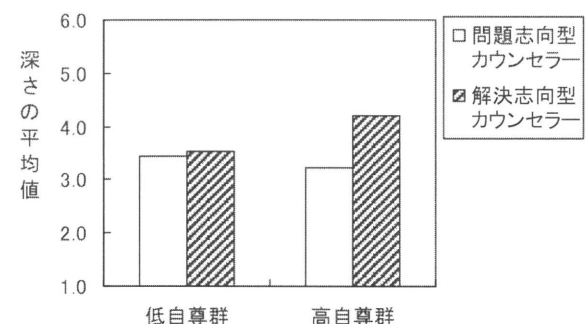


図2. 深さに及ぼす交互作用効果

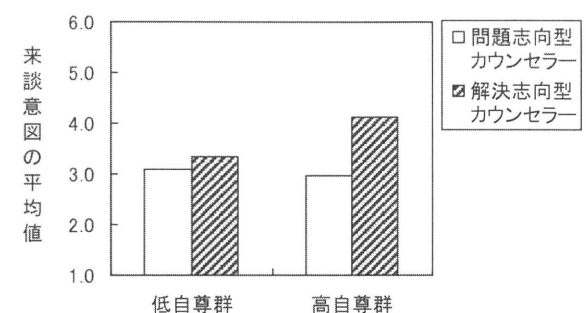


図3. 来談意図に及ぼす交互作用効果

表1. カウンセラーの応答志向性の主効果

	問題志向型カウンセラー		解決志向型カウンセラー		有意性(p)
	M	(SD)	M	(SD)	
受容度	4.32	(0.12)	4.73	(0.13)	*
関心度	3.63	(0.14)	4.22	(0.15)	*
誠実度	4.33	(0.14)	4.82	(0.14)	*
成功度	3.73	(0.12)	4.32	(0.12)	**
来談意図	3.03	(0.15)	3.75	(0.18)	*
共感性	4.07	(0.13)	4.45	(0.14)	+
深さ	3.33	(0.16)	3.87	(0.18)	+
有用度	3.68	(0.14)	4.05	(0.15)	+

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ (n=60)

型カウンセラーにおける自尊心の効果 ($p<.10$) が認められた。深さでは、高自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の有意な効果 ($p<.05$)、傾向差水準で解決志向型カウンセラーにおける自尊心の効果 ($p<.10$) が認められた。来談意図では、高自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の効果 ($p<.01$)、解決志向型カウンセラーにおける自尊心の効果 ($p<.05$) が認められた。

考 察

カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプとの交互作用効果に関する仮説 1 は支持されなかった。この原因として順序効果の影響が考えられる。すなわち、解決志向先行条件、問題志向先行条件いずれにせよ、2 度目に呈示されるカウンセラーの応答型が高く評定されたため、一方の条件では仮説に合致した方向の結果が示されたのに対し、もう一方の条件では逆方向の結果が示される項目が多かった。そのため、呈示順序の条件間で相殺され、交互作用効果が認められるほど十分な差異が得られなかったことが考えられる。

カウンセラーの応答志向性の主効果は受容度、関心度、誠実度、成功度、来談意図で有意に認められ、共感度、深さ、有用度では傾向差水準で認められた。Jordan & Quinn (1994) でも、問題志向型アプローチよりも解決志向型アプローチにおいて面接の深さ（有益であったかどうか）が高く評価され、問題のない時の経験などを問う質問がクライアントにとって新たな気づきを生む可能性があるからだろうと推論している。本研究で用いた尺度の深さはカウンセリングが表面的だったか新たな気づきを得るものだったかを問う項目であった。このことから、クライアントにとって新たな気づきを生むものかどうかという側面の評価には解決志向型の応答が有効に機能する可能性が考えられる。また、カウンセラーの応答志向性の主効果が認められた項目のうち、共感度、関心度、誠実度は、クライアント中心療法を創始したRogers (1957) が人間の成長を促進するうえでのカウンセラーの基本的な態度として示した①共感的理解、②無条件の肯定的配慮（関心）、③真実性（自己一致）にそれぞれ該当すると考えられる。よって、カウンセラーの態度について評定する際、カウンセラーの応答志向性がこれらの側面の評定に影響を及ぼしていることが示されたと

言える。

以上の結果や、来談意図において問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーが高く評価された結果（表 1）を考慮すると、来談可能性のある大学生観察者にとっては、解決志向型の応答によるカウンセリングが受け入れやすい可能性が考えられる。ただし、多くの項目で順序効果が認められている点に留意をする必要がある。

次に観察者の個人差特性との関連について述べる。まず、高自尊心群においてカウンセラーの応答志向性の単純主効果が認められ、問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーに対して共感度やカウンセリングの深さ、来談意図を高く評定されていた。これに対し、低自尊心群においては、両カウンセラーに対する評価に有意な差は認められなかった。すなわち、高自尊心群は問題志向型カウンセラーよりも解決志向型カウンセラーを高く評価するという点でのみ仮説 2 が支持された。高自尊心群では解決志向型カウンセラーに対して肯定的な評価を行うということが、本研究により初めて示された。

カウンセラーの応答志向性と自尊心との交互作用効果が認められた項目で、自尊心の単純主効果が認められ、低自尊心群よりも高自尊心群のほうが解決志向型カウンセラーを高く評定していた。解決志向型カウンセラーはクライアントの強さなど肯定的側面に着目した応答を行う。自尊心の認知的一貫性仮説 (Nadler, 1998) に基づけば、そのような自尊心を高めうる解決志向型の応答は、高自尊心群にとって、自尊心の高さを維持するうえで親和的に受け取られ、積極的に高く評定したことが推量される。

実験 2

目 的

カウンセラー側の要因を実験参加者内要因として実施した実験 1 では、カウンセリング状況の評定に及ぼすカウンセラーの応答志向性の主効果が認められた。しかし、多くの変数で呈示順序の効果が示されていた。そこで、実験 2 では呈示順序の影響を排除するために、同一刺激材料を用いて 2 要因をともに実験参加者間要因配置として実施した場合、実験 1 と同一の結果が得られるかどうかについて検討する。そのさい、仮説については実験 1 と同じ仮説 1、仮説 2 を設けた。

方 法

実験参加者：岩手県立大学2、3年生（男性5名、女性36名）及び盛岡大学の3年生（男性14名、女性28名、性別無回答3名）の計86名が実験に参加したが、性別要因の交絡を避けるため女性のみ64名を分析の対象とした。

実験デザイン：カウンセラーの応答志向性要因（解決志向型カウンセラー／問題志向型カウンセラー）×クライアントの応答タイプ要因（肯定的応答クライアント／否定的応答クライアント）の2要因配置計画であり、ともに実験参加者間要因で実施した。

手続き：実験2においても、実験1と同様の手続きをとったが、教示内容については、実験1とは実験デザインが異なる点や視聴VTRでのクライアント要因の操作の有効性を高めるという方向性を考慮し、部分的に改訂した。実験参加者はカウンセリング場面が収録された刺激材料を視聴した後に、質問紙に回答した。

従属変数：カウンセラーやカウンセリングへの評価項目については実験1と同じ項目を用いたが、クライアント側の操作チェック項目については、より直接的にクライアント側の要因が反映された表現となるよう改訂したほか、項目を新たに2つ追加し、最終的に次の4項目で構成した。①前向き度、②後ろ向き度、③例外応答度、④否定的応答度である。また、実験2においても、実験1に準じ、個人差特性指標を取り上げた。

結 果

操作チェック：各操作チェック項目を従属変数として2要因（ 2×2 ）分散分析を行った。その結果、カウンセラーの応答志向性の主効果が肯定的注目度（ $F(1,60)=35.17, p<.01$ ）、否定的注目度（ $F(1,60)=19.74, p<.01$ ）、問題追究度（ $F(1,60)=5.10, p<.05$ ）において有意に、また例外追究度（ $F(1,60)=3.00, p<.10$ ）において傾向差水準で認められた。肯定的注目度、例外追究度は、問題志向型カウンセラーより解決志向型カウンセラーが高く評価され、また否定的注目度、問題追究度では、解決志向型カウンセラーより問題志向型カウンセラーが高く評価された。

一方、クライアントの応答タイプの主効果は後ろ向き度（ $F(1,60)=4.07, p<.05$ ）、例外応答度（ $F(1,60)=9.33, p<.01$ ）、否定的応答度（ $F(1,60)=10.02, p<.01$ ）で有意に認められ、クライアントの後ろ向き度、否定的応答度については肯定的応答クライアントより否定

的応答クライアントの方が高く評価され、例外応答度については否定的応答クライアントより肯定的応答クライアントの方が有意に高く評価された。

これらの結果から、カウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプの操作が有効であったと判断できる。

実験デザインに基づく分散分析結果：各評価項目を従属変数として2要因分散分析を行った。その結果、理解度（ $F(1,60)=5.05, p<.05$ ）と来談意図（ $F(1,60)=5.36, p<.05$ ）において有意な交互作用効果、非言語肯定度（ $F(1,60)=3.51, p<.10$ ）では傾向差水準で交互作用効果が認められた（図4～図6）。単純主効果の検定の結果、理解度では否定的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性の効果（ $p<.05$ ）、来談意図では解決志向型カウンセラーにおけるクライアントの応答タイプの効果（ $p<.05$ ）がそれぞれ有意であった。なお、非言語肯定度での単純主効果は認められなかった。

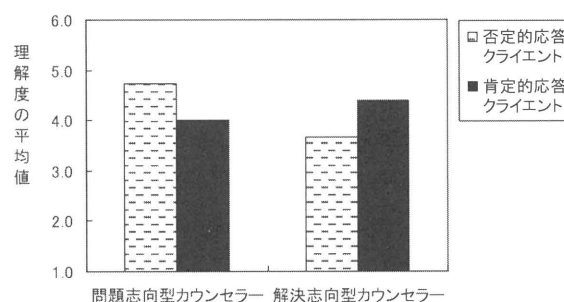


図4. 理解度に及ぼす交互作用効果

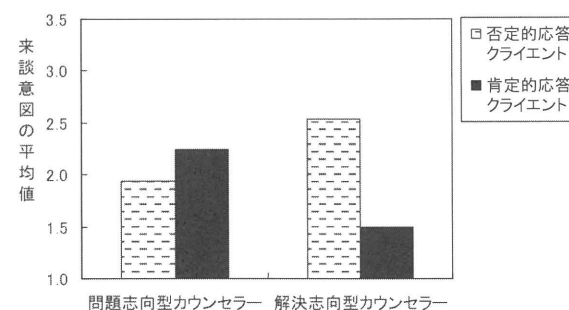


図5. 来談意図に及ぼす交互作用効果

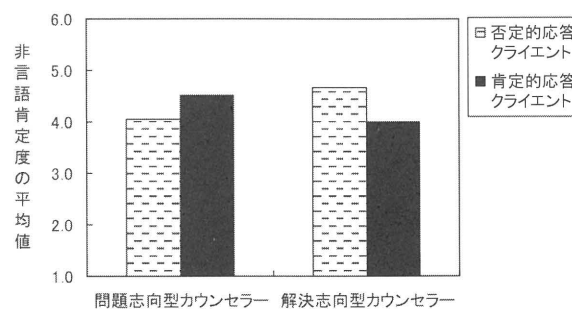


図6. 非言語肯定度に及ぼす交互作用効果

カウンセラーの応答志向性の有意な主効果（表2）が、誠実度（5%水準）、円滑度（10%水準）において認められ、いずれも解決志向型カウンセラーより問題志向型カウンセラーが高く評定された。

表2. カウンセラーの応答志向性の主効果

	問題志向型カウンセラー		解決志向型カウンセラー		有意性(p)
	M	(SD)	M	(SD)	
誠実度	4.83	(0.18)	4.25	(0.22)	*
円滑度	4.37	(0.20)	3.82	(0.24)	+

+ $p < .10$ * $p < .05$ (n=64)

観察者の個人差特性指標との関連性：個人差特性である自尊心は中央値分割とし、それぞれ高群、低群に分割した。各評定項目を従属変数としてカウンセラーの応答志向性(2)×クライアントの応答タイプ(2)×自尊心(2)の3要因分散分析を行った。その結果、有意な3要因交互作用効果が積極性 ($F(1,56)=11.41$, $p < .01$)において認められた(図7)。また、カウンセラーの応答志向性と自尊心との交互作用効果が受容度 ($F(1,56)=3.17$, $p < .10$)、誠実度 ($F(1,56)=3.25$, $p < .10$)において傾向差水準で認められた(図8～9)。積極性における有意な単純交互作用効果は、肯定的応答クライアントにおけるカウンセラーの応答志向性と自尊心の単純交互作用効果として認められたが ($p < .01$)、否定的応答クライアントではこの効果は認められなかつ

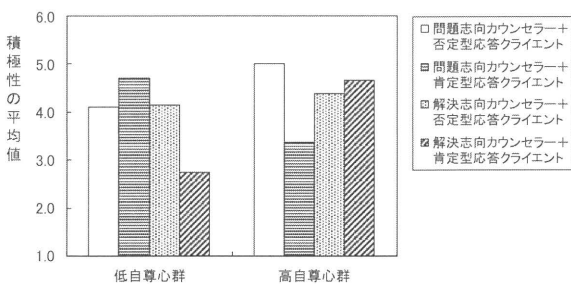


図7. 積極性の交互作用効果

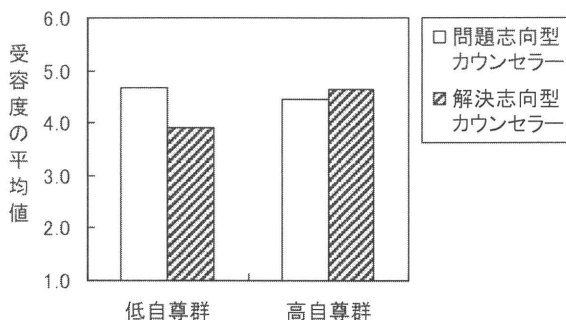


図8. 受容度に及ぼす交互作用効果

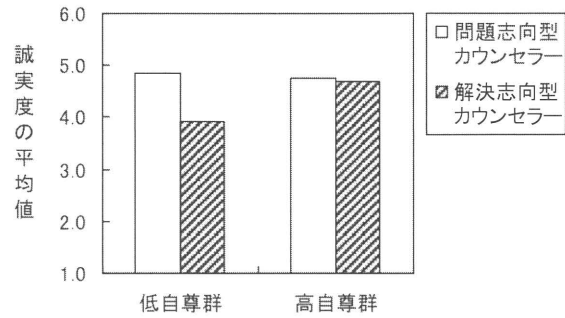


図9. 誠実度に及ぼす交互作用効果

た。単純主効果の検定の結果、低自尊心群及び高自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の効果（ともに $p < .05$ ）、問題志向型カウンセラー及び解決志向型カウンセラーにおける自尊心の効果（ともに $p < .05$ ）が認められた。受容度での単純主効果は低自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の効果 ($p < .10$)、解決志向型カウンセラーにおける自尊心の効果 ($p < .10$) がそれぞれ傾向差水準で認められた。誠実度での単純主効果は低自尊心群におけるカウンセラーの応答志向性の効果 ($p < .05$)、解決志向型カウンセラーにおける自尊心の効果 ($p < .10$) が傾向差水準で認められた。

考 察

実験1では認められなかったカウンセラーの応答志向性とクライアントの応答タイプとの有意な交互作用効果が理解度と来談意図において認められた。ただし、理解度は仮説1と一致する交互作用効果であるのに対し、来談意図は仮説1とは逆の交互作用効果が示された。このように実験1とは結果が異なる理由として、次の2点が考えられる。第1に順序効果の影響である。前述したとおり、実験1においては問題志向型、解決志向型の応答の呈示順序により期待された仮説が実証されなかった可能性が指摘された。これに対し、実験2では順序効果を排除できたため、一部の項目で期待された交互作用効果が認められ、実験1と実験2で相反する結果になったことが考えられる。

第2に実験参加者の属性による影響が考えられる。今回、分析対象となった実験参加者のうち、おおよそ半数（36名）が社会福祉学部の2年生または3年生であり、実験1で主に対象とした学部1年生に比べると、社会福祉学や福祉心理学に関する知識を有していたと思われる。そして、社会福祉学の教科書では「問題解決アプローチ」に基づいた解決の段階を中心に組

み立てられていることが多いという指摘 (De Jong & Berg, 1998) を考慮すると、社会福祉学部2, 3年生の実験参加者は問題志向型の応答によるアプローチに親和的であり、来談意図にそれが反映された可能性が考えられる。

カウンセラーの応答志向性の主効果が、誠実度と円滑度において認められた。問題志向型カウンセラーは当面の問題解決に向けて直接的、論理的にカウンセリングを展開することから、円滑度、すなわちカウンセリングの展開がスムーズかどうかといった側面の評価には問題志向型の応答が有効に機能した可能性が考えられる。

観察者の自尊心については、積極性、受容度において仮説2と一致する方向で交互作用効果が示された。したがって、高自尊心群は低自尊心群よりも解決志向型の応答が受け入れやすいことが示唆される。一方、低自尊心群については、解決志向型カウンセラーよりも問題志向型カウンセラーの積極性、受容度、誠実度が高く評価されていることから、自尊心が低い人たちにとっては、否定的側面に十分注意を向けるカウンセラーの態度が肯定的に評価された可能性が示唆される。

総合的考察

本研究の目的は、カウンセラーとクライアントの応答志向性の一致・不一致がカウンセリングやカウンセラーへの印象評価に及ぼす効果について検討することであった。カウンセラー側の応答志向性として解決志向型カウンセラーと問題志向型カウンセラー、クライアント側の応答タイプとして否定的応答クライアントと肯定的応答クライアントを取り上げ、混合要因計画（実験1）と実験参加者間要因計画（実験2）で検討した。カウンセラーとクライアントの応答志向性が一致する場合の方が不一致の場合よりもカウンセラーの特性や来談意図が高く評価されるという仮説1は実験1では支持されず、実験2では一部の項目において支持された。またカウンセラーの応答志向性の主効果については、誠実度において実験1と実験2とでは相反する結果が示された。このように結果が異なった理由として、順序効果や実験参加者の属性による影響が考えられた。実験2では約半数の実験参加者が社会福祉学部の2, 3年生であり、対人援助に関する既知知識

が影響したことが推量された。

カウンセラーの応答志向性の主効果は、実験1では解決志向型カウンセラーの受容度、関心度、誠実度、成功度、来談意図が有意に高く評価され、共感度、深さ、有用度が傾向差水準で高く評価された。これに対し実験2では、問題志向型カウンセラーの誠実度が有意に高く評価され、円滑度が傾向差水準で高く評価された。有意または傾向差水準で高く評価された項目数が解決志向型カウンセラーは8項目であったのに対し、問題志向型カウンセラーは2項目であった点や、来談意図において解決志向型カウンセラーが有意に高く評価された点を考慮すると、解決志向型カウンセラーが大学生観察者にとっては受け入れやすい可能性が示唆されるが、必ずしも全面的に支持する結果が得られているわけではない点に留意が必要である。

個人差特性指標である自尊心との関連については、解決志向型カウンセラーの共感度、受容度、誠実度といったカウンセラーの印象に関する側面、深さや来談意図といったカウンセリング全体に関する評価には低自尊心群よりも高自尊心群が高い評価をした。クライアントの強さなど肯定的側面に着目した応答は、高自尊心群にとって、自身の自尊心の高さを維持するうえで好意的に受け取られ、高く評価した可能性が考えられる。一方、実験2において、低自尊心群は、解決志向型カウンセラーよりも問題志向型カウンセラーの積極性、受容度、誠実度を高く評価していることから、自尊心が低い人たちにとっては、否定的側面に十分注意を向けるカウンセラーの態度が高く評価された可能性が示唆される。今後はWachtel (1993) が示したような、治療者によるさまざまな言い回しに対しても、自尊心の程度によって認知の仕方が異なるかどうかさらに検討することが重要であろう。

最後に、本研究の臨床場面への応用と限界について述べる。「カウンセリングへの実際の来談には、個人の内部条件（パーソナリティ要因等）や問題の性質に加えて、その個人の持つカウンセリング・カウンセラー認知の在り方が関与している」（稲田, 1999）と指摘されているように、大学生のカウンセリング状況に対する知覚の仕方や来談意図を測定することは、来談率向上に向けた心理学教育や学生のニーズの把握のうえで有用であろう。そして、来談率の向上への取り組みが、心の問題を抱えた大学生の援助に寄与するものと考えられる。また、特定の応答志向性で展開するカウンセ

ラーがどのような印象をもたれるかについて詳細に検討していくことは、言語方略の質的向上を考えいく上で重要であろう。本研究ではカウンセラー役を臨床経験をもつ社会人大学院生に担当してもらったことで、質問紙または音声呈示のみによる従来の調査研究よりもリアリティを高めえたものの、観察者によるカウンセリング場面の評定の検証という制限がある点に留意が必要であり、今後は、実際のロールプレイを通じて大学生の個人差特性指標とカウンセラーの言語方略との関連性についてさらに検討することが望まれる。また、本研究での実験参加は一般大学生であり、今後は大学生以外も対象とした検討も必要であろう。

注

- 1) 本来であれば、本研究はカウンセラーの応答に着目している点を強調し、「解決志向型応答」「問題志向型応答」とすべきであるが、クライアント要因での名称との混乱を避けるため、便宜的にこれらの名称とした。

引用文献

- Barak, A., & Dell, D. M. **1977** Differential perceptions of counselor behavior: Replication and extension. *Journal of counseling Psychology*, **24**, 288-292.
- Barkham, M., & Shapiro, D.A. **1986** Counselor verbal response modes and experienced empathy. *Journal of counseling Psychology*, **33**, 3-10.
- De Jong, P., & Berg, I. K. **1998** *Interviewing for Solutions*. 2nd Edition Pacific Grove. (玉真慎子・住谷裕子(訳) **2004** 解決のための面接技法: ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き 第2版 金剛出版)
- de Shazer, S., Berg, I. K., Lipchik, E., Nunnally, E., Molnar, A., Gingerich, W., & Weiner-Davis, M. **1986** Brief Therapy: Focused solution development. *Family Process*, **25**, 207-221.
- Erickson, M. H. **1954** Special techniques of brief hypnotherapy. *Journal of clinical and Experimental Hypnosis*, **2**, 109-129.
- Gustavson, J. L., Cundick, B. P., & Lambert, M. J. **1981** Analysis of observer's responses to the Rogers, Perls, and Ellis films. *Perceptual and Motor Skills*, **53**, 759-764.
- 長谷川啓三 **1999** ソリューション・フォーカスト・セラピー 岡堂哲雄ほか(編) 家族心理学辞典 金子書房
- Hill, C. E., & O'Brien, K. M. **1999** *Helping Skills*. Washington, DC: APA
- Hill, C. E., Thames, T. B. & Rardin, D. K. **1979** comparison of Rogers, Perls, and Ellis on the Hill Counselor Verbal Response Category System. *Journal of counseling Psychology*, **26**, 198-203.
- 稲田素子 **1999** 大学生のカウンセリング観: 来談時の心理に関する自由記述からの検討 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 178.
- 入谷好樹 **2003** 長期心理療法, 短期心理療法, およびゲシュタルト療法での治療仮説の比較 鳴門教育大学研究紀要, **18**, 43-49.
- Ivey, A. E. **1982** Basic attending skills. Massachusetts. (福原真知子ほか(訳編) **1985** マイクロカウンセリング “学ぶ—使う—教える” 技法の統合: その理論と実際 川島書店)
- Johnson, L. D., **1994** Psychotherapy in the age of accountability. Haddon Craftsmen, USA.
- Jordan, K., & Quinn, W. H. **1994** Session two outcome of the formula first session task in problem- and solution-focused approaches. *The American Journal of Family Therapy*, **22**, 3-16.
- 木村真人・水野治久 **2004** 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について: 学生相談・友達・家族に焦点をあてて カウンセリング研究, **37**, 260-269.
- 北村文昭 **1998** ブリーフサイコセラピーにおける解決志向療法の可能性: 従来の学派との比較・検討を交えて 青山学院大学教育学会紀要, **42**, 85-95.
- LaCrosse, M. B., & Barak, A. **1976** Differential perception of counselor behavior. *Journal of counseling Psychology*, **23**, 170-172.
- Lee, D. Y., & Uhlemann, M. R. **1984** comparison of verbal response of Rogers, Shostrom and Lazarus. *Journal of counseling Psychology*, **31**, 91-94.
- 宮田敬一 **1994** ブリーフセラピーの発展 宮田敬一(編) ブリーフセラピー入門 金剛出版Pp.11-25.
- 中西公一郎・鈴木真理・山本和郎 **1998** 心理面接訓練としての20分のロール・プレイングの量的分析 心理臨床学研究, **16**, 396-401.

- Nadler, A. **1998** Relationship, esteem, and achievement perspectives on autonomous and development help seeking. In Karabenick, S. A.(Ed.), *Strategic help seeking: Implications for learning and teaching*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.61-93.
- 織田信男・佐藤正恵 **2003** カウンセラーの属性評定に及ぼすカウンセラーの言語的・非言語的行動の不一致と表象型と面接回数の効果について アルテスリベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), **73**, 11-16.
- Rogers, C. R. **1957** The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of counseling Psychology*, **21**, 95-103. (伊東博(編訳) **1966** ロージャズ全集 4 サイコセラピーの過程 岩崎学術出版社 Pp117-140)
- 佐治守夫 **1985** 治療的面接の実際 ゆう子のケース 日本・精神技術研究所
- Schmidt, L. D., & Strong, S. R., **1970** "Expert" and "inexpert" counselors. *Journal of counseling Psychology*, **17**, 115-118.
- 島本淳子 **1996** カウンセラーの応答の指示性と来談者の心的状態との適合性に関する実験的研究 カウンセリング研究, **29**, 9-18.
- 白木孝二 **1994a** ブリーフセラピーの今日的意義 宮田敬一(編) ブリーフセラピー入門 金剛出版 Pp.26-41.
- 白木孝二 **1994b** BFTC・ミルウォーキー・アプローチ 宮田敬一(編) ブリーフセラピー入門 金剛出版 Pp.102-117.
- Stoltenberg, C. D., & Pace, T., & Maddux, J. E. **1986** Cognitive style and counselor Credibility: Effects on client endorsement of rational emotive therapy. *cognitive Therapy and Research*, **10**, 237-243.
- 高工弘貴 **2001** ソリューション・フォーカスト・アプローチ 國分康孝(監修) 現代カウンセリング事典 金子書房
- 田中伸明 **2006** 共感的理解の伝達を意図するカウンセラーの応答の特徴について: クライアントへの影響も含めた検討 カウンセリング研究, **39**, 113-123.
- Uhlemann, M.R., Lee, D.Y., & Martin, J. **1994** Client cognitive responses as a function of quality of counselor verbal responses. *Journal of counseling & Development*, **73**, 198-203.
- Wachtel, P.L. **1993** *Therapeutic communication Knowing What to Say When*. Guilford Publications. (杉原保史(訳) 2004心理療法家の言葉の技術 金剛出版)
- 脇本竜太郎 **2008** 自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **47**, 160-168.
- 山本眞利子 **1996** クライアントのレディネス状態の違いにおける解釈がクライアント反応の評定に及ぼす影響 カウンセリング研究, **29**, 1-8.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 **1982** 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.